

私と社会, そのつながりを問う 全体プログラム

開催日・会場 2023年12月2日（土）10時～16時 YCC 県民文化ホール
12月3日（日）9時30分～13時 山梨大学大村記念学術館大村記念ホール

開催スケジュール

<12月2日（土）> YCC 県民文化ホール（山梨県立県民文化ホール） 会議室

- 10:00 受付開始
- 10:30 オープニング, 趣旨説明
- 10:40 口頭発表①
[非日本語母語話者との交流に関するアンケート調査
ーさらなるつながりを目指してー](#)
服部真子（神田外語キャリアカレッジ）・田嶋香織（関西外国語大学）
- 11:20 口頭発表②
[ヒューマンライブラリーの開催を目指す「わたしたち」の葛藤 ー開催者研修での対話
を通して](#)
西村由美（聖学院大学）・宮崎聡子（関西学院大学）・秋田美帆（関西学院大学）
- 12:00 休憩
- 13:30 プロローグ：参加者でブレインストーミング, プレ企画の報告
参加者の皆さんとメイン企画に先駆け「私と社会」についてのイメージを膨らます簡単なワークを行います。
- 14:00 メイン企画「私と社会, そのつながりを問う」
・井上昌善 「外部連携を通じた社会科授業の意義と可能性ー地域社会の課題を取り扱った実践を事例としてー」
・西角綾夏 「人と人とのつながりから考える、わたしにとっての「社会」とは～市民性醸成の NPO 勤務及び子どもショートステイ協力家庭・住み開きの活動を通して～」
・佐野香織 「日常を生きる・社会をつくるー「わたし」「わたしたち」がかかわるプロセス経験」
3人の登壇者の方々には、ご自身の実践と実践に駆り立てるものとは、自分にとって社会とつながるとは、その時のつながる社会とは、について話題提供をしてもらい、これらの問いをフロアとともに深めていきます。
- 16:00 1日目クロージング

<12月3日（日）> 山梨大学大村記念学術館大村記念ホール

- 9:30 受付開始
- 10:00 オープニング, 1日目の簡単な振り返り
- 10:10 口頭発表③
[利用者の愚痴に対する外国人介護職員の共感的な反応の特徴
ー介護施設での会話に着目してー](#)
釜田友里江（神田外語大学）
- 10:50 口頭発表④
[社会形成の担い手としての日本語教師
ーいかに省察し「めざす社会」をイメージするかー](#)
古屋憲章（山梨学院大学）・小畑美奈恵（創価大学学士課程教育機構）・櫛田ひかる（早稲田大学大学院日本語教育研究科・修士課程修了）・野宮公美（早稲田大学大学院日本語教育研究科・修士課程修了）
- 11:30 休憩
- 11:40 「私と社会, そのつながりを問う」～エピローグ～
1日目のメイン企画を受けて「私」は何を感じたか, フロアで議論・共有します。
- 12:45 クロージング
- 13:00 閉会

＊お菓子の持ち寄り＊

本学会研究集会の恒例となっておりました、「お菓子の持ち寄り」企画です。対面開催となりました今回、復活です！

研究集会のキーワードである「私」と「社会」との「つながり」から、ご参加のみなさまに、任意でご自身とつながっている（？）社会のご当地グルメ、お菓子をお持ちいただき、他の参加者と一緒に楽しんでいただければと考えております。ぜひこの企画にもご協力ください。みなさまの思いも共有できればうれしいです。

● 会場までのアクセス

● YCC 県民文化ホール (山梨県立県民文化ホール) 「会議室」 12月2日(土) 会場

- ・ JR 甲府駅からバス：片道 100 円

甲府駅「南口」バスターミナル 1番のり場、山梨交通バスに乗車 バス停「県民文化ホール前」にて下車

※(1)番のり場は、一部行き先が異なるバスがありますので、乗車する際に運転手に「県民文化ホール前」停留所を通るかご確認ください。

- ・ タクシー 800 円程度
- ・ 徒歩 JR 甲府駅南口より平和通りを南下、「相生」交差点で西へ、「県民文化ホール北」交差点で南へ 約 20 分
- ・ 詳しくは[こちら](#)



● 山梨大学大村記念学術館大村記念ホール 12月3日(日) 会場

- ・ JR 甲府駅からバス：片道 100 円

甲府駅「北口」バスターミナル 2番 乗り場「武田神社」または「積翠寺」行き バス停「山梨大学」下車

- ・ 徒歩 JR 甲府駅北口より武田通りを北上 約 15 分
- ・ 詳しくは[こちら](#)



口頭発表① 2023 年 12 月 2 日 (土) 10:40~11:10

非日本語母語話者との交流に関するアンケート調査ーさらなるつながりを目指してー
服部真子 (神田外語キャリアカレッジ)・田嶋香織 (関西外国語大学)

日本に来日する外国人の数は年々増加している。観光目的での来日はもちろん、留学生として、また最近では日本の少子化に伴う人材不足を補う働き手として日本政府も積極的に外国人を受け入れるという方針に舵を切り、その数も飛躍的に伸びている。日本在留の外国人が 320 万人を超え、過去最多になったというニュースも最近流れた。日本語が母語ではない人々との接触機会が増えていく中、どのような交流が行われているのであろう。本研究では日本人を対象に日本在住の外国人との接触に関するアンケート調査を行った。

今日の生活で欠かせない携帯電話、これがあるおかげで日本語能力に自信のない外国からの来訪者も自分の母語で必要な情報を得、日本で行動することが容易にできるようになった。つまり日本語を習得していなくても不都合を感じるものが減りつつあるのだ。来日して日本語を学ぶ留学生に行った調査によると、留学生が日本語を使用する機会があるのは、「場所を尋ねる」、「予約を取る」等の実務的なやり取りではなく、雑談の際が一番多いという興味深い結果が出ている (2020 高屋敷)。雑談とは、必要な情報のやりとりではないが人間関係を構築するため又構築したいいい関係を保つためのやりとりである。実際日本に住む外国からの人達が望む質、頻度の日本人との交流が持てているのだろうか。

2020 年に同志社大学で行われた日本人学生の留学生に対する意識調査によると、日本人学生は概ね留学生に対し好意的なイメージを持っているものの、なかなか自ら積極的に留学生と接する機会をもてずにいるという結果が見られた。又、実際に留学生と接した後では留学生との交流は想像より難しいものではなく楽しいものだったと好意的な感想を持つ日本人学生が多かったにも関わらず、そこから次に繋がる交流が持てていない現状も窺えた。

本調査では、アンケートの対象を学生だけではなく社会人にも広げ、どれくらいの頻度で外国の人と交流をしているか、どの様に交流の機会を設けているか、これまでの交流の経験、また今後の日本人の外国の人との交流への希望等についての意見を尋ねた。調査の結果、日本人は基本的に日本在住の外国人に対し好意的に思っており、困っている時は助けたい等関わりを持ちたいという気持ちはあるものの、実際にはどのように交流を持てばいいのかわからない、自分の語学力に自信がない等の理由で、希望する程外国の人と接する機会を持てていない様子が窺えた。ただ機会さえあれば積極的に関わっていきたいという意識のある人も少なくなく、きっかけさえあればそこから長期的な関係を築くことが可能なのではないかと期待できる調査結果であった。本インタビューの結果を踏まえ言語文化教育研究学会第 11 回研究集会ではディスカッションを行い、日本人と日本在住の外国の方々との交流の今後についての意見を交換できればと考える。

梶原雄 (2020) 「日本人学生は外国人留学生をどう見ているか-同志社大学の日本人学生からの視点-」『同志社大学 日本語・日本文化研究』第 17 号、93 - 111.

高屋敷真人 (2020) 「中級日本語教材作成のための接触場面アンケート調査 (3)」『関西外国語大学留学生別科』日本語教育論集 30 号、47-57.

口頭発表② 2023年12月2日（土）11：20～11：50

ヒューマンライブラリーの開催を目指す「わたしたち」の葛藤 ―開催者研修での対話を通して

西村由美（聖学院大学）・宮崎聡子（関西学院大学）・秋田美帆（関西学院大学）

本発表は、3日間にわたる「ヒューマンライブラリー（以下HL）開催者研修」の実施を報告し、研修参加者との対話から浮かび上がってきた「HLの開催を通して他者とつながろう・人と人をつなげていこうとする際の葛藤」について議論するものである。

HLはデンマークで生まれた対話の場を図書館に見立てたイベントであり、多様性にかかれた地域社会づくりが求められる現在において、人と人のつながりを広げ、差別や偏見を低減する効果があると言われている（坪井2020）。我々は所属機関でHLを実施し、そこで生まれたつながりを発展させようとHL開催者研修を企画した。参加者がHLの理念と実践方法を学び、研修後に多文化共生社会の創り手として一歩を踏み出すための支援となることを目指した。

研修初日は「読者（聞き手）」としてHLを体験した上で、「本（語り手）」「読者」「司書（運営者）」の経験談を聞くことによって、HLがどういうものであるのか、体験的な理解を促した。参加者からは、HLを実践する上での不安や悩み、様々な質問が寄せられた。

2日目は、参加者自身が「本」「司書」となる体験をした。互いが安心して語り・聞くことができる場を作り、各々が「本」として人生の物語を紡いだ。「本」として語ることの意義を実体験できたという声が聞かれ、我々にとっても「本」が生まれる瞬間を目の当たりにするような経験となった。その後、理論編として「ヒューマンライブラリ Nagasaki」代表である宮崎聖乃氏による講演が行われた。HL開催までの道のり、様々な工夫をしながら多様な参加者への配慮を実現してきたことが語られ、参加者は前日からの体験によって湧き出た疑問に対する答えを見つけたようであった。

一週間後の3日目は、実践企画案を持ち寄り、意見交換をする場をオンラインで設けた。各参加者は具体的な実践企画を準備しており、実現に向けて互いにアドバイスするなど、協働的なやりとりが起こっていた。

HLの理念に沿って「誰もが安心して対話ができる場」を目指して研修全体をデザインし、ファシリテートするよう心がけた。その意図を参加者が十分にくみ取り、活動と活動の間にも対話が生まれ、「HLを体験できる機会が少ない」「協力できる仲間がない」「開催までの一歩が踏み出せない」などの思いを共有することもできた。事後アンケートでは、参加者同士の関係性が自然とできあがっていったことが評価された。一方で、対話の中から顕在化した課題もある。中でも共感的に議論されたのは、HLで「本」として語ってほしいと声をかけること自体が相手を「マイノリティ」としてラベルづけることにつながるのではないかという点である。これは、HL未経験の第三者から差別や偏見を助長するのではないかと疑念を持たれたり、批判されたりする（坪井2018）ことと無関係ではない。HLの開催に関わるものは、このような疑念を自身に向け、葛藤を抱きながら対話の場に臨んでいるのではないだろうか。

【参考文献】

- 坪井健（2018）「自己と他者の関係性の再構築」坪井健・横田雅弘・工藤和宏編著『ヒューマンライブラリー 多様性を育む「人を貸し出す図書館」の実践と研究』pp.294-330.明石書店
- 坪井健（2020）『ヒューマンライブラリーへの招待 生きた「本」の語りがココロのバリアを溶かす』明石書店

口頭発表③ 2023年12月3日（日）10:10~10:40

利用者の愚痴に対する外国人介護職員の共感的な反応の特徴

－介護施設での会話に着目して－

釜田友里江（神田外語大学）

本研究は、介護施設での外国人介護職員と利用者の会話に着目し、利用者の愚痴に対する外国人介護職員の共感的な反応の特徴を捉えることを目的とする。日本の人手不足は深刻化しており、今後、更に外国人介護従事者に頼ることになる。わたしたちは、外国人介護従事者が安心して職場の業務に取り組める環境を考えていく必要がある。利用者のネガティブな感情により、介護職員の心身への負担が過重となることが指摘されている（横山他 2022）。また、横山他（2022）によると、そのような環境の中で支援を行う介護職員には、支援の対象である利用者や協働する介護職員のネガティブな感情に寄り添える「感情的共感力」が欠かせないという。本研究は、利用者の愚痴に対する外国人介護職員の共感的な反応について、分析を行う。

調査は2023年に行った。外国人介護職員と利用者による会話を収録した。収集した会話データを会話分析の方法を用いて分析する。

外国人介護職員と利用者との会話を分析した結果、以下の特徴がみられた。まず、利用者の愚痴について、愚痴の内容は、大きく2つ観察された。1つ目は、コロナ禍で家族と十分に面会できないなど現状に関することである。2つ目は、施設での過ごし方など、施設のサービスに関わることである。次に愚痴に対する外国人介護職員の共感的な反応を取り上げる。前述した2つ目の愚痴には、施設のサービスに関連することが語られているため、このような愚痴に対して求められる共感には、2つの要素が複雑に関係しているということが示唆された。1) 利用者の気持ちに寄り添うことである。2) 利用者の愚痴に介護施設のサービスに対するニーズが含まれる場合、そのニーズに対処することである。日常会話では、相手との関係構築や維持のために、共感が示されることがある。介護において、介護職員に求められることは、なるべく利用者の希望に沿うような生活を送るための支援である。そのため、利用者との会話における共感、関係構築だけでなく、利用者のニーズを汲み取り、より良いサービスに繋げる役割も果たしていることが観察された。外国人介護職員は利用者の愚痴に対して共感的な反応を示す際に、単に利用者の気持ちに理解を示すだけでなく、介護施設の一員、支援者として必要であれば謝罪も含めながら、利用者に寄り添おうとしていた。しかし、利用者の愚痴を正確に捉え、対応することは容易ではない。なぜなら、利用者の愚痴に対して共感的な反応を示すということは高度な技術が必要であり、同時に日本語で聞く・話すという能力が外国人介護職員に求められているからである。利用者の愚痴を正確に捉えることが困難な場合、利用者のニーズを汲み取ることも難しくなる。高い共感力が求められていることが示唆された。

参考文献

横山さつき・大橋明・土谷彩喜恵・海老諭香・福地潮人・堅田明義（2022）「高齢者介護に従事する介護職の共感的反応・行動の因子構造」『人間福祉学会誌』21(2) 39-48.

口頭発表④ 2023年12月3日（日）10:50~11:20

社会形成の担い手としての日本語教師
—いかに省察し「めざす社会」をイメージするか—
古屋憲章（山梨学院大学）・小畑美奈恵（創価大学学士課程教育機構）・
櫛田ひかる（早稲田大学大学院日本語教育研究科・修士課程修了）・
野宮公美（早稲田大学大学院日本語教育研究科・修士課程修了）

本発表では、個々の日本語教師が自身の理念（＝日本語教育観）の基層をなす自身にとっての「めざす社会」をイメージしながら、その「めざす社会」に近づくような日本語教育実践を行うことの重要性を主張する。

2023年5月26日、「日本語教育の適正かつ確実な実施を図るための日本語教育機関の認定等に関する法律案」が国会で可決され、同法が成立した。同法は2024年4月1日に施行される。同法の成立により、今後、制度的な位置づけのもと、特に日本国内の日本語教育機関で働く日本語教師には、専門家として日本語教育活動に携わることが求められるようになる。その結果、日本語教師は自身の活動が社会的な活動、すなわち社会の形成に関与する活動であることをより意識せざるを得なくなる。

専門家としての日本語教師とは、「どんなフィールドに行っても、あるいは現在のフィールドが社会的影響の下で変化しても（実際には変化しないフィールドはありえない）、自身のめざす日本語教育観を軸として自らの経験やもてる力を総動員して、フィールドに合った日本語教育実践を編成し、必要に応じてフィールドそのものを変えていく力」（舘岡 2021: 104）を備えた人である。日本語教育活動が社会的な活動であるとすれば、ここで言う日本語教育観には、どのような社会をめざして日本語教育活動を行うかも含まれる。自身にとっての「めざす社会」のイメージをもたずして、ただ目の前の学習者に対して「日本語を教える」ことに邁進した場合、無意識のうちに、望まざる社会の形成に加担する可能性がある。例えば、1945年以前には、中国大陸や南方諸地域において、大東亜共栄圏という当時の国策遂行の一環として、現地住民の意に反する日本語教育活動が行われた。その際に行われた日本語教育活動は、結果的に国家・地域間の支配・被支配という構造を維持するための施策の一端を担うこととなった（木村 1991）。そうした失敗を繰り返さないためには、個々の日本語教師が自身にとっての「めざす社会」をイメージしながら、日本語教育活動に携わることが必要となる。

これまで行われてきた日本語教師の省察（内省）に関する議論においても、省察の対象を自らが行う日本語教育実践から実践を取り巻く社会へと広げることは主張されてきた（岡崎・岡崎 1997、山田 1996）。また、省察にあたり、実践を取り巻く社会の変革を志向する態度が必要であることも主張されてきた（三代ほか 2014）。一方で、どのように個々の教師が省察すれば、自身にとっての「めざす社会」をイメージしたうえで、「めざす社会」のイメージにもとづき、日本語教育実践を行うことができるかに関しては、十分に議論されているとは言い難い。そこで、本発表では、どのように省察を促せば、個々の日本語教師が自身にとっての「めざす社会」をイメージできるか、また、その「めざす社会」のイメージにもとづいて、自身の日本語教育実践を構想できるかに関しても、言及する。

参考文献

岡崎敏雄・岡崎眸（1997）『日本語教育の実習—理論と実践—』アルク

木村宗男（1991）「戦時南方占領地における日本語教育」木村宗男編『講座日本語と日本語教育 15—日本語教育の歴史—』明治書院、pp.145-159

舘岡洋子（2021）「「専門性の三位一体モデル」の提案」舘岡洋子編『日本語教師の専門性を考える』第6章、ココ出版、pp.97-110

三代純平・古屋憲章・古賀和恵・武一美・寅丸真澄・長嶺倫子（2014）「新しいパラダイムとしての実践研究—Action Research の再解釈—」細川英雄・三代純平編『実践研究は何をめざすか—日本語教育における実践研究の意味と可能性—』第2章、ココ出版、pp.49-90

文部科学省（2023）「日本語教育の適正かつ確実な実施を図るための日本語教育機関の認定等に関する法律案」

https://www.mext.go.jp/b_menu/houan/an/detail/mext_00042.html

山田泉（1996）『異文化適応教育と日本語教育 2 社会派日本語教育のすすめ』凡人社